新潮文庫

中世炎上

瀬戸内晴美著

新潮社

日　陰

I313-K5
コ6528

中世炎上

定価480円

新潮文庫 草144 G

昭和五十二年一月二十日 発行
昭和五十三年十二月十五日 六 刷

著者　瀬戸内晴美
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊟ 印刷・株式会社金羊社　製本・憲専堂製本株式会社
© Harumi Setouchi 1977　Printed in Japan

新潮文庫

中世炎上

瀬戸内晴美著

中世炎上

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

新枕の女

御代は後深草、年号は康元元年、秋のことであった。

ひるすぎまで時雨れていたのに、いつのまにか夜空が澄みわたり、二条富小路の里内裏の南庭の広い池の表には、十六夜の月影がさわやかに映っていた。中秋の月を仰いだのは、もうひと月の前になったが、この夜の月の冴え方もひと通りではなく、夜がふけるにつれて、かえって庭が次第に明るくなっていくようにみえる。

月光にそそのかされるのか、庭の草の根にひそむ虫のすだく声も、いつもより賑やかに空気をふるわせつづけている。

時折、池の中に魚のはねる音がすると、月影が乱れ、さざなみだった池の面が金粉を撒いたように光りながら無数の輪を押しひろげていく。

池の岸のところどころから、白銀の矢のような鋭い光芒が池の中心に向ってのびているのは、池の魚を狙う鼬を脅す目的で、あわびの貝の光る内側を、月に向けて池のふちに散在させてあるのだった。

「どうしてそのように聞きわけのないことをおっしゃって、困らせるのでしょう」

虫の声の止むのを気づかうように、女の声はあくまで細かった。

東の対も西の対も、もう蔀戸をおろしていたが、声のする寝殿の母屋だけはまだ簾が下り、簾ごしにほのかな燭台の灯が洩れていた。

答えはなく、簾のかげから、つと人影が音もなくすべり出て、南庇の端近に立った。夜目にも艶やかな紋織の絹の白さに月光が映えて青く染める。

なで肩の、首も胴も細い、きゃしゃな軀つきは、身の丈もまだのびまどっているように小柄であった。髪さえ長ければ、そのまま、少女と信じてしまいそうな繊細な肢体の少年である。

月の面にむけて顔をあげると、切れ長な瞳にたまった泪が、月光に濡れて、今にもこぼれそうに見える。やや厚い唇の端をおし下げ、少年は柱によりかかり、すねたように押し黙っている。

「上さま、これほど申しあげても、そうまできわけて下さらないなら、もうおひまをいただくほかございません」

細い声がふたたび簾の奥の秋草を描いた几帳のかげからする。

「なぜだまっていらっしゃるのです。上さまはいつからそんなにかたくなにおなりになったのでしょう。それとも、もう口をきくのもおいやなほど、このわたくしが憎くなっておしまいなのですか」

言葉は責めているのに、声はあくまでやわらかく、訴えるように、わびるように、少年の背にまつわってくる。

今年十四歳の、まだうら若い後深草帝は、それでもかたくなに口をつぐんだまま、ひたすら月を仰ぎつづけていた。

月の面を見つづけるのは忌むべきことと、昔の物語にあったような気がする。青白い磨ぎすま

した刃物のような今夜の月光は、たしかになつかしいよりもどこか淋しく物哀しく、見つめていると、魂までぬきとられてしまいそうな心細さと不吉さを感じさせてくる。

几帳の裾の秋草が揺らぎ、そのかげから、衣ずれの音をたてながら、なよやかに女があらわれた。部屋の灯が女にすべて吸いつくされていたように、女が部屋を出るとたちまち、光りを失ってかげってしまった。

くせのない黒髪が重そうに背をおおい、その裾は扇型にひろがって、床にひいた女の袿の裾よりも長かった。

細面の顎の細い顔の淋しさが、ちんまりした鼻の愛らしさと、やや、目尻の下ったまつ毛の濃い瞳でなごめられている。並居る内裏の女房たちの中で、帝から最もなつかれている大納言典侍近子だった。

近子は権大納言四条隆親の娘だったが、母に早く死別し、叔母の貞子に幼い時から可愛がられた関係で、貞子が、時の権勢、太政大臣西園寺実氏の室になった頃は、ふたりに引きとられ、実氏の猶子となって、実氏の後見で、早くから宮中へ宮仕えに出されたのだった。

近子が十四歳ではじめて宮中へ上った時には、前年即位した後深草帝はまだようやく五歳になったばかりだった。

顔立は人形のように整い、上品で愛らしいのに、なぜか、この幼帝はいつまでも腰が定まらず、くらげのようで、人並に立ち歩きすることが出来ない。

智恵づきは並より早く、神経質で、女房たちの気分の波にもす速く反応してくる。年齢より、ませて大人びていると思うにつけ、いつまでも立てず、這子か、いざりのように、よろよろ這い

歩く姿が痛ましく、若い近子はまず胸をつかれてしまった。

後深草帝の母后は、実氏と貞子の間に生れた姞子であったので、近子はいっそうこの幼帝に親身なものを感じるのだった。そういう近子の気持を幼帝の方でも敏感に受けとめて、「典侍大、すけだい」と、近子の後ばかり追うようになった。

眠る時も、乳母や、他の女房のお伽ではいつまでも寝つかず、「すけだい」が添寝しなくては眠らなくなってしまった。

典侍といってもまだ十四や十五の少女のことなので、近子の方が横になるやいなや、一日の疲れがあふれ、たちまち寝こんでしまう時もある。そんな時、はっと、気がついて目をさますと、いつのまにか帝は小鳥のつがいがひとつになって、互いの羽の中にくちばしをさしいれ、まりのようになって眠るのとそっくりに、近子の胸の中にしっかりと頭をさしつけ、小さな掌に、近子のようやく実った乳房をしっかりと握りしめているのだった。

「まあ、上さま、はなして下さいな」

近子は帝の稚さも忘れて、あらわにひきだされ、人にゆだねられている自分の乳房の重さが恥しく、耳も首も緋牡丹のように染めあげ、思わず邪険に、帝の小さな掌をひきはなしてしまう。

何度か、そういうことのあるうちに、近子は帝が、乳房から掌をもぎはなされる時、すでに目を覚ましているのを気づくようになった。

もぎはなされると、さも夢の中のように無抵抗にされるままになって、顔までくるりとそむけてしまう。それでいて、またうとうと近子が睡魔のとりこになると、小さな手がするっと近子の胸にすべりこみ、乳房にふれ、指がまるでつい、そうすべったというふうに乳首にのび、それを

つまんだり、なでたり、軽くひっぱってみたりするのだった。

くすぐったさと、むずがゆさに、近子は笑いをこらえ、軀を震わせまいと必死に歯をかみしめる。今度は自分が眠ったふりをして、いつ帝のいたずらをやめさせようか、としお時をはかろうとする。やがて、帝の、おずおず動く指の感触が、乳房をくまなく触れるうち、不思議な戦慄が身内の奥深いところから湧きあがってくる。その震えは一たびおこると、あとからあとから、池の波紋のようにとめどもなく湧き拡がってくる。思わず耐えきれなくなり、声の出そうな口を帝の耳に押しあて、ふっと息をふきこんでしまう。

帝はそのくすぐったさに、思わず乳房の手をはなし、仔猫をつぶしたような声をあげて、全身で近子にしがみついてくる。それを受けとめるには、近子も思わずしらず、全身の力をこめて、帝を抱きささえていなければならなかった。

宝治三年、それまで使っていた二条西洞院の、閑院内裏が失火して焼失してしまう事件があった。

その夜も、帝は近子を離さず、近子の胸に頭を埋めて眠っていたが、突然、人々の叫び声がおこり、一瞬のうちに火の手がまわり、内裏が火の海になっていた。

近子は飛び起きるなり、自分の袿で帝をくるみ、抱きあげた。帝は生れた時から人並よりは発育が悪く、ことに小さい方だったが、もうこの時は七歳になっていたので、十六歳の近子には抱きあげて走ることは出来ない。たちまち、ふたりしてその場に倒れこんでしまった。そうするうちにも火のはぜる音、柱や梁の焼け燃える音がひびき、熱気が四方からあふれ、炎の火照りで顔も手も耐えられないほど熱くなる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「上さま、早く、この背に、背の上にお乗り下さい」
近子が必死になって背を廻し、帝の萎えた腰を自分の背にすくいあげようとする。
その時、ふたりの背後で、ごうっと火柱の燃えさかるような凄じい音がして、ばりばりっと木の燃えはじける音が重なった。
「上さま、上さま」
「上さまはどこにいらせられます」
「すけだい！　すけだい！　上さまは御無事か！」
火の海の中から、女房や近習の武士たちの呼び声がする。
近子はもう夢中で、帝を背負うことをあきらめ、その手を握りしめると、帝の腕が抜けてもこの場合はためらっていられないと、一気に煙の中にとびこんで、声のする方へ駈けだしていった。
「上さま！　ああ、御無事で」
濃い煙は思ったより層が薄く、一息につき破れば、そこの庭には人々が群れ集っていた。
八方からどっと人にかけよられても、近子も帝もまだ今の恐怖から覚めきれず、表情が面のように硬ばっている。
「おおっ、おおっ」
誰かが獣のような声をあげて叫んだ。
「上さまが、お立ちになっていらっしゃる」
「あっ、ほんに、上さまが、おひとりで」
声は愕きと懼れに包まれて、たちまち集っている人々の口から口に伝っていった。

近子もわれにかえって、まだ握りしめている帝の方をみかえった。

七歳の帝は、たおやかな腰をすっくとのばし、二本の脚でしっかりと大地をふみしめていた。人々の驚嘆の声に包まれて、帝もようやく自分が生れてはじめて自分の脚と腰で、真直大地に立っていることを確めた。

あの時くらい嬉しいことがまたとあっただろうか。

近子はすねて自分に背をむけている帝の後姿をしみじみ眺めながら思った。今十四歳の帝は、背丈も、あの頃からは倍近くにのびている。いくら美しくてもあまりにお小さすぎると、女房たちの間でも、ひそかに噂しあっていたけれど、今の丈なら、並よりやや小さいというくらいで、それほど見劣りすることはない。

それにしても、あのお小さく腰萎えだった帝が、もう女御を迎えられるというのだ。

御婚儀の定まったのは、今年の春のことで、愈、女御御入内の日取が定められたのは、この夏のことであった。十一月十七日という吉日も、もうあと一カ月ばかりの後にせまっている。

女御は、太政大臣西園寺実氏の次女公子と定められている。公子は、帝の母后姞子の実妹にあたるから、帝からは正真の血縁の叔母であった。年齢も帝の十四歳に対し、公子はすでに二十五歳を迎えている。あまりに年齢が開きすぎると、この婚儀に首をかしげる者もあったが、実氏は、こんな例は歴史にはいくつもあっただことだと、人の噂など耳にもいれようとしない。

今は大宮院と呼ばれている姞子も、あまり丈夫とは思えない帝の后には、母性的に帝をつつんでくれる人の方が望ましいだろうと、実妹の入内を好都合のように思っている。

宮廷の結婚などは、昔からどうせ本人の意志などは無視されて、周囲の政治的都合でとり定め

られてしまうことが珍しくなかった。

実氏は、自分の二人の娘を二人とも、后にさしだすことを理想としていたので、公子も、姉の姞子についで、ぜひとも后の位につけたいと望んでいた。そのため公子の側には若い公達など一切寄せつけず、公子はあくまで後宮にあげる姫君として、世間からは、ひたかくすようにしてかしずき育ててきたのだ。

後深草帝が目に見えて不機嫌になり、憂鬱になってきたのは、公子との婚礼が目前に迫って、もう逃れようもなくなってからである。

帝の心の中は、どんな深い襞の奥まで読みとれるようになっていた近子には、帝が二十五歳の叔母との結婚を心から嫌がっていることを識っていた。

何とかして当日までに帝の気持を和らげ、入内してくる女御に対して、なつかしい気持のひとかけらも持つようにと、それとなく、話をそこへ持っていこうとすると、たちまち帝は不機嫌になり、こめかみに青筋を浮べたまま、貝のように口も心も閉ざしてしまうのであった。

今夜も今夜とて、近子が太政大臣家では、公子の入内の時につき従う女房たちに女童や、雑仕までもみめかたちのよい者を選びぬいているので、公子の入内のあとは、太政大臣家には、老女と、しこめばかりが残ってしまいそうだという世間の噂話を伝えだしたら、ふいに帝が例によって貝のようになってしまったのだ。

それではならない、やはり、女御を迎えられるには、やさしい恋しい心で待ってあげるのが男らしい殿御の心というものではないかと、近子が、一度はいっておかなければならないと思っていたことを、少しきっとなってお話ししかけると、帝ははじめて、これまで見せたこともないよ

うな冷い表情になって、
「知っているよ。常磐井の大臣の二の姫は、大宮院とは同じ腹のごきょうだいなのに、しっとりしたところがまるでなく、とげとげしい方だと、女房たちが話していたのを聞いているのだ。そんなひとにどうして恋しい気持などいだけるものか」
と、吐きすてるようにいわれる。
「まあ、誰がそんなはしたないことを」
「中納言典侍と按察典侍の話だ。一昨日の夜、そちが方たがえだといって、どこかに出かけていた留守のことだ」
「そんなたわいもない噂話など、どうして本気になさるのでしょう。わたくしは、常磐井の大臣にも准后さまにも実の子のように可愛がられて、おそれ多いことながら大宮院さまとも二の姫ともきょうだいのようにお親しくさせていただき育ちました。按察や中納言よりも、わたくしが一とう二の姫を存じあげておりますとも。二の姫は、御聡明すぎて、ちょっと冷い感じがしないことはありませんけれど、御顔だちといい、御心ばえといい、大宮院さまにも決して負けはいたしません。それでなくとも、女は自分が相手より年が上だということは気のひけるものでございます。二の姫も御心のうちではどんなにかお年のことを気にもんでいらっしゃいましょう。そのことだけでも、帝がおやさしくなついておあげになって、御心をほぐしておあげになるよう、お願い申しあげたいのです」
話しているうちに、近子は自分のことばにうながされて涙が出そうになってきた。
「年なんか気にしていない。すけだいだって二の姫とそうちがわない年ではないか。それでもす

けだいを一度だって自分より九つも年上の女だなどへだてを感じたことはないのだもの」
「まあ、それでは、何の心配もないのですね。それなら、帝はなぜ、この頃のように気ぶせになられて御食事もはかばかしく召し上っては下さらないのですか」
近子がそういって少し膝をすすめた時から、また帝は貝になり、あげくのはて、ついと近子をとり残し、南庇の間へ出てしまわれたのであった。
近子が近づくと、帝はそれから逃げるように南庭へ下りていく。近子ももう、今は口をつぐんで、帝の後を黙々と追った。
白い直衣に桔梗色の裾濃の指貫をはいた帝は烏帽子もつけているせいで後姿がすっきりと見える。
広い池のめぐりには秋草につつまれた小径がついていた。池の南岸には、足を休める唐様の小亭もある。
「方たがえにはどこへ行っていた」
ふいに、背をみせたまま帝がつぶやくようにいった。
「え、何とおっしゃいました」
「一昨夜の方たがえには、どこへいったのかと訊いたのだ」
「ですから、あの、四条大宮の、ゆかりの者の家へと申しあげたでは……」
声がふるえてくるのをふせごうとして、近子は思わず歩みをとめてしまった。
「嘘だ」
帝が十四歳とは思えない落着きはらった冷い声でいい、ふいにふりむいた。月をまともに受け

ているので近子はふいをうたれ、狼狽した表情をかくしようもなく、思わず片袖で月光をふせぎ顔をそむけた。

「一昨日の夜は、裏庭の林の外に、誰やらの網代車がひそんでいた。そちは西の対から裏庭へおりて、まっすぐその車へすすんでいったのだ」

「上さまは……」

近子はおどろきとおそれで、ことばが咽喉に凍りつく。

「尾けていった」

「……」

「話してくれ、車の中にいたのは冬忠か、それとも雅忠か」

近子はとっさに身をひるがえし、その場から逃げようとした。それより早く帝の手が、近子の袿の袖をしっかりと捕えていた。

まさか一昨夜の逢いびきを、帝に尾行されていたとは夢にも考えなかったことなので、近子は帝に袖をとられたまま、恥しさと怖れで、前後の思慮もなく、ひたすら逃げようともがいた。

帝はそれを逃がすまいとして、いつのまにか背後からしっかりと抱きすくめている。

ふいに、月がその場面を見かねたかのように、雲の陰に身をかくしてしまった。人の気配におびえたのか、つい今しがたまで、空気が鳴るように鳴きさわいでいた虫の音まで、ひたっと一瞬かき消えてしまった。

近子の肩から落ちた小袿の裾を踏みしだいて、帝は更に深く近子を抱きとどめようとする。

身だしなみのよい近子が、下着にまでたきこめている香が、もがくたびに体臭ととけまじり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com